JSL中国人学習者の語彙学習ストラテジーと受容語彙サイズとの関連

天野, 裕子
九州大学大学院地球社会統合科学府地球社会統合科学専攻

https://doi.org/10.15017/1806664

出版情報：地球社会統合科学研究. 6, pp.1-15, 2017-02-28. 九州大学大学院地球社会統合科学府
バージョン：
権利関係：

『地球社会統合科学研究』6号 1～15
Integrated Sciences for Global Society Studies
No.6 , pp. 1～15

JSL中国人学習者の語彙学習ストラテジーと受容語彙サイズとの関連

天野裕子（アマノユウコ）

1．はじめに

日本語教育の現場では、しばしば初級から中級に移行する「初中級」の段階に大きな壁があると言われるが、その原因の１つが学習するべき語の増加であると思われる（三好2005）。

現行の日本語能力試験では、出題基準を一般公開していないが、『日本語能力試験の改善に関する検討会』の分科会の一つである『出題基準分科会漢字表・語彙表部会』は「日本語で書かれたものを読み、話されたことを聞いて理解するには、約10,000~18,000の語が必要である」（押尾等2008：82）という見解の元、語彙表を作成しており、上級に向けて大量の語数を習得しなければならないことは間違いない。また、初級と中級では語彙の性質についても差異があり、初級では生活上必要となる基本的な語彙が中心であるのに対し、中級になると抽象的な語彙が取り上げられる（山下2005：96）。このような語彙の変化も中級に移行する際の学習の難易度が上がる原因の一つであろう。

語彙学習については、『日本語教育事典（1982：281）』が以下のように述べている。

> 「限られた時間の中で、十分な語を教室の学習だけで与えられることは不可能なことである。学習者が未知の語に出会っても、自分でわがものにしていく力を付けることが大切である」

「自分でわがものにしていく力」が必要であるとは、すなわち自律学習[i]が必要であることを意味する。オックスフォード（1994：1-2）は、学習ストラテジーは学習者の積極的で自発的な学習の方法であり、それを適切に使う事で言語能力が向上し、自律学習が促進されるものであると述べている。つまり、学習者は語彙学習ストラテジーを適切に使用することで、語彙を「自分でわがものにしていく」ことが可能になると考える。

また、日本学生支援機構（2016）の平成27年度の調査によれば、「日本語学校」と呼ばれる日本語教育機関において日本語を学習する留学生56,317人の内、34％に当たる19,190人が中国籍の学習者であり、JSL[ii]環境で日本語を学ぶ中国人学習者は非常に多いと言える。

そのため、本稿ではJSL中国人学習者の語彙学習ストラテジーの使用傾向と語彙学習ストラテジーと語彙知識との関連を明らかにすることで、数多くいる日本語を学ぶ中国人学習者の語彙学習の支援につなげることを目標とする。

2．用語の定義

2．1 受容語彙

Nation（2001：23-59）は語彙を受容語彙（receptive vocabulary）と産出語彙（productive vocabulary）の２種類に分類した。ここでいう「受容」とは『聞くこと』と『読むこと』を通して他者からの言語インプットを受け取り、そのインプットを理解しようと試みることを意味している。また、Nationは語彙知識を「語の形」、「意味」、「使用」の３つに大きく区分し、それらをさらに３つの下位区分に分類している。例えば語の「意味」は、「語形と意味」、「概念と指示物」、「語連想」の３つに分けられ、それらが更に受容語彙（R）、産出語彙（P）の２つの要因に分けられている（表１参照）。相澤（2006）はそれぞれに18要因ある語彙知識を、１語ずつ全て確認するのはほぼ不可能であるため、一般的にその単語を知っているかどうかの指標として、「意味」の中の「語形と意味」の受容語彙が確認されていると述べている。

そのため、本論文での受容語彙についても、学習者が『聞くこと』と『読むこと』を通して他者から受け取る語彙の内、それらの語形と意味を知っている語彙とし、「意味」の中の「語形と意味」の受容語彙を測定することで、どの程度受容語彙を知っているのか、つまり受容語彙のサイズを測定する。

表１　語彙知識の「意味」の記述　（Nation 2001：27, 相澤訳2006：33より一部抜粋）

意味 (Meaning)	語形と意味 (form and meaning)	R	その語はどんな意味を表すか
		P	その意味を表すためにどんな語形を使用するか
	概念と指示物 (concept and referents)	R	その概念には何が含まれるか
		P	その概念が指すものは何か
	語連想 (associations)	R	その語はどんな語を連想させるか
		P	その語の代わりにどんな語を使えるか

(R)受容知識　(P)産出語彙

２．２　語彙学習ストラテジー

オックスフォードの学習ストラテジーの定義は「学習をより易しく、より早く、より楽しく、より自主的に、より効果的にし、かつ新しい状況に素早く対処するために学習者がとる具体的な行動」(オックスフォード1994：8-9) というもので、これは学習ストラテジーのすばらしさや豊かさを伝えるために考えられた。

語彙学習ストラテジーと学習ストラテジーの関係については、Nation (2001：217) が「語彙学習ストラテジーは、言語学習ストラテジーの一部であり、一般的な学習ストラテジーの一部である (筆者訳)」と述べている。つまり、語彙学習ストラテジーは学習ストラテジーの下位分類に属するものである。

そのため、本稿での語彙学習ストラテジーの定義はオックスフォードの定義を基にして「新しい語彙を理解し、学び、記憶することをより易しく、効果的にするための学習者の思想や具体的な行動」とする。

３．先行研究

３．１　語彙学習ストラテジーの分類

語彙学習ストラテジーの分類は研究者によって、どこまでを範囲とするのか、あるストラテジーをどのカテゴリーに分類するのか見解が分かれている。Gu and Johnson (1996) の分類は語彙学習ストラテジーだけではなく語彙学習のビリーフを含み、Schmitt (1997) は語彙学習の段階を考慮した上でオックスフォード (1994) の言語学習ストラテジーの分類を利用した分類を行った。Nation (2001) は語彙知識の側面や学習者の語彙の学習段階を考慮した分類法を開発している。以下、それぞれの詳細を述べる。

Gu and Johnson (1996) は大規模なリストを作成しているが、それらのカテゴリーは「語彙学習に関するビリーフ」と「語彙学習に関するストラテジー」の大きく２つに分けられる。「語彙学習に関するストラテジー」は①メタ認知規則②推測ストラテジー③辞書ストラテジー④ノートテイキングストラテジー⑤記憶ストラテジー（リハーサル）⑥記憶ストラテジー(エンコーディング)⑦活性化のストラテジーの７つに分類される。この分類では語彙学習のビリーフを取り入れることで、ビリーフとストラテジーとの関連を明らかにできる。また、「語彙学習に関するストラテジー」の７つのストラテジーは、それぞれ３つ以上の下位ストラテジーを持つ。たとえば⑦活性化のストラテジーは、「スピーチや作文でできるだけ新しく学んだ語彙を使おうとする」「学んだ語彙を使って自分で文を作る」などのより具体的な下位ストラテジーを持っている。そのため、他の分類よりも大規模であり、学習者が使用するストラテジーをより詳細に記述できる。

Schmitt (1997) は、オックスフォード (1994) の言語学習ストラテジーの分類を基に、語彙学習ストラテジーの分類法を開発している。まず、語彙習得のプロセスを加味し、ストラテジー全体を「新出語の意味を見つけるためのストラテジー」と「出会った語彙の記憶を強化させるためのストラテジー」に分類した。それから、Oxfordの６つのカテゴリーの中から、社会的ストラテジー、記憶ストラテジー、認知ストラテジー、メタ認知ストラテジーの４つを取り入れ、そこに新たに語彙学習ストラテジー特有のカテゴリーである「決定ストラテジー」を付け加えた。この分類はOxfordの分類を基にしているため、聴解など他の分野との比較が容易であるという利点がある。

Nation (2001) は語彙知識の側面や学習者の語彙の学習段階を考慮し、ストラテジーを「プランニング」、「情報源」、「処理過程」の３つに分類した。「プランニング」は何に、いつ、どのように注意を払うかを決めるもの、「情報源」は新出語彙を学習するためにその語彙に関する情報を入手するもの、「処理過程」は語彙を覚える方法と覚えた語彙を使えるようにするための方法に関するものを指す。この分類は他のものと異なり、学習者の語

彙の認知過程や語彙学習の段階を分類に取り入れているために、学習者が取る具体的な行動だけでなく、それぞれの学習段階でどのような点に注意を払うのかという注意の向け方などもストラテジーに含まれる。ただし、学習者が取る具体的な行動を表すストラテジーは他の分類に比べると少ない。

目標言語が英語ではあるものの、中国語話者を対象に調査を行ったGu and Johnson (1996) の調査結果との比較が容易であること、最も巨大なリストであること、ビリーフと学習ストラテジーの関係についても考察が可能であることから、本校ではGu and Johnson (1996) の分類を使用することにした。なお、それぞれのストラテジーの詳細については後述する。

3．2　語彙学習ストラテジーと語彙サイズとの関係

3．2．1　目標言語が英語の研究

語彙学習ストラテジーと語彙サイズの関係については、英語学習者を対象としたものにGu and Johnson (1996)、Hamzah et al. (2009)、Kalajahi and Pourshahian (2012)、Tanyer and Öztürk (2014)、日本語学習者を対象としたものに橋本 (2007) がある。いずれの研究も語彙サイズと相関関係や因果関係がある特定のストラテジーを明らかにすることを目的としていたが、それぞれ調査結果は異なっている。

Gu and Johnson (1996) は、中国の大学における上級レベルの英語学習者850人を対象にした調査を行っている。その結果、受容語彙サイズと正の相関があったのは「自主性」、「活性化ストラテジー」、「選択的注意」、「辞書を引くためのストラテジー」、「意味のエンコーディング」、「拡大した辞書ストラテジー」、「意味を重視したノートテイキングストラテジー」、「文脈的なエンコーディング」、「言語的な手がかり／周りの文脈を使う」、「用法を重視したノートテイキングストラテジー」、「連想／精緻」、「背景知識や幅広いコンテクストを使う」、「リストを使う」、「語構造を使う」であり、語彙サイズと負の相関があったストラテジーは、「視覚的な繰り返し」、「語彙は暗記するべきである」であった。また、語彙学習ストラテジーが受容語彙サイズに与える影響を調べるために、重回帰分析を行った結果、「自主性」、「辞書を引くためのストラテジー」、「活性化のストラテジー」、「意味のエンコーディング」が正の有意な値、「視覚的な反復」「イメージを使う」が負の有意な値となった。つまり、自主的に語彙を学ぶ、辞書の引き方を知っている、語彙を使用する、語彙を意味ごとに分類したり関連語を覚えたりするというストラテジーを使用するほど、語彙サイズは広くなる一方、機械的に何度も見る、語彙を覚える際にイメージと結びつけるなどのストラテジーを使用するほど語彙サイズは小さくなると考えられる。

Hamzah et al. (2009) は、イランの大学生125名を対象にして、語彙学習ストラテジーが受容語彙サイズに与える影響を調べるために重回帰分析を行ったところ、対象者が非常によく使用していた「ノートをとったり、ハイライトをつけたりする」「新しい語彙を何回も学習する」「英語のメディアを利用する」、中程度の利用であった「バイリンガル辞書を使用する」「何度も言う」、使用が低かった「ネイティブとの会話」「クラスメイトと語彙を学習する」「体の動きを使って語彙を学習する」の９つのストラテジーにおいて正の有意な値が得られたと述べている。

Kalajahi and Pourshahian (2012) は、北キプロスの英語教育を学ぶ大学生125名を対象にした調査を行った結果、記憶ストラテジーと認知ストラテジーを含む「心理言語学的ストラテジー」と受容語彙サイズには相関関係が見られず、社会ストラテジーとメタ認知ストラテジーを含む「メタ認知ストラテジー」については負の相関関係が見られたと報告している。

Tanyer and Öztürk (2014) は、トルコの英語教育専門の大学生80名を対象にした調査を行い、語彙学習ストラテジーが受容語彙サイズに与える影響を調べるために重回帰分析を行ったところ、最もよく使用される決定ストラテジーと受容語彙に有意な値は見られず、最も使用が少なかった社会ストラテジーと受容語彙に有意な値が見られたと述べている。また、認知ストラテジーとメタ認知ストラテジーについても有意な値が見られた。この結果について、Tanyer and Öztürは語彙習得のためには、全てのタイプのストラテジーを満遍なく使用する必要があるため、使用が低いストラテジーに有意な値が見られたのではないかと考察している。

これらは全て英語の上級レベルの学習者を対象にしたものであるが、語彙サイズと相関関係や因果関係がある特定のストラテジーは明らかになっていない。Tanyer and Öztürk (2014) は、使用頻度との関連に言及しているが、Hamzah et al. (2009) の研究では使用が低いストラテジーについても相関関係が見られている。また、Gu and Johnson (1996) は本稿と同じく中国人学習者を対象としているが、英語以外の言語を学ぶ中国語話者にも同じ傾向が見られるのかは不明である。特に、中国語と日本語では、表記や語彙に共通点が多く、英語学習の場合とは使用する語彙学習ストラテジーが異なる可能性がある。

３．２．２　目標言語が日本語の研究

橋本（2007）は、初級のハンガリーの大学生23人を対象にGu and Johnson（1996）のアンケートと受容語彙と産出語彙を測るテストを行った。その結果、受容語彙と産出語彙に共通した傾向として「記憶ストラテジー（エンコーディング）」のうち、「文脈的なエンコーディング」は、受容語彙とも産出語彙とも正の相関が示された。一方、「活性化のストラテジー」は産出語彙とのみ正の相関が見られた。この調査の結果とGu and Johnson（1996）に共通した点があまり見られなかった原因として、橋本はGu and Johnson（1996）の対象は学習歴７年程度の上級学習者だったのに対して、橋本の対象は学習歴１年程度の初級学習者だったことにあるのではないかと述べている。日本語学習者を対象にアンケートと語彙サイズの関連に言及し、また、語彙知識を受容語彙と発表語彙に分けて双方との関連を調査した研究は他にはない。しかし、橋本自身も指摘しているが、中級以上の学習者は自律学習が必要とされるため、初級学習者とは使用するストラテジーが異なると考えられる。

３．３　中国人日本語学習者の語彙学習ストラテジー使用に関する研究

ここでは、まず中国の大学で語彙学習ストラテジー使用に関する調査、研究を行った王（2007）と于（2010）の概観をする。その後、日本の大学において調査を行った中西（2008）の研究を見ていく。

王（2007）は、中国の日本語専攻54人と非専攻の大学生47人を対象に、O' Malley and Chamot（1990）の分類を元にしたアンケートを行った。その結果、日本語専攻の学生は「丸暗記する」という項目を除いて、全てのストラテジーを日本語非専攻の学生よりも多く使用していることが明らかになった。また、どちらの学生もメタ認知ストラテジーの「選択的注意」を多く使用し、「語彙を分類する」というストラテジーの使用は少なかった。更に、王は非専攻の学生に語彙テストを行い、アンケートとの相関関係も調査している。その結果、「連語で記憶する」「日本語を実際に使うことで語彙を覚える」「英語の発音から日本語の外来語の意味を推測する」という３つの認知ストラテジーと語彙テストに有意な正の相関が示された。最後に、語彙テストの得点の上から25％を上位群、下から25％を下位群とし、T検定による分析を行ったところ、「間違いを正す」「連語で記憶する」「文脈から語の意味を推測する」「辞書で単語の発音、意味、用法を調べる」「日本語を実際に使うことで語彙を覚える」に有意な差があり、成績がよい学習者は文を注意深く読んで語彙を推測し、間違えた際はきちんと訂正し、辞書を引くよい習慣があることを示唆している。このように対象者が日本語専攻であるかどうかで使用する語彙学習ストラテジーに差異があることや、日本語を学習する中国語話者の語彙知識と使用する語彙学習ストラテジーとの関連性を明らかにした研究は王のみである。ただし、この研究では学習段階について言及していない。

于（2010）もまた、中国の大学において日本語学習者を対象にした調査を行っている。于はOxfordの開発したSILL（Strategy Inventory for Language Learning）を基にした調査用紙を作成し、初級対象者132人に実施した。１年半後同対象者に上級レベルに達した段階でも再度同様の調査を実施し、その結果を比較した。それによると、ストラテジー使用率が全体的に上がっているが、使用の傾向に大きな差は見られず、どちらでも補償ストラテジーの使用が最も高く、記憶ストラテジーの使用が最も低かった。また、132人の学習者の内、それぞれ日本語能力試験の「文字・語彙」「聴解」「読解」「総合」の成績の上位30人を上位群、下位30人を下位群とし、２つの集団に有意な差が見られるか分析した。その結果から、上位群には以下のような特徴があることを示唆している。

１）上位群は連想や連絡を用いて記憶する。例えば、「発音と漢字の表記を結びつける」「覚える時に頭の中でその情景を思い浮かべたりする」など。
２）上位群は多様なストラテジーを用いる。例えば「母語話者を模倣する」「様々なものを読む」
３）上位群は非言語手段（補償ストラテジー）をよく使用する。

一方、下位群には以下のような特徴があった。

１）機械的な記憶ストラテジーを好む。
２）学習の計画をする（メタ認知ストラテジー）が、実行できない。
３）上位群よりも情意ストラテジーを使用する。下位群は授業中に教師や同級生に対してストレスを感じたり、実際に日本語を使う際はその文化差などにストレスを感じたりして、不安や焦りを感じる傾向強く、それらを緩和するために情意ストラテジーをよく使用する。

于（2010）の研究では、同じ対象者に対してストラテジー調査のためのアンケートを初級の段階と上級の段階と２回実施することで、学習段階による語彙学習ストラテジーの使用傾向の差異を明らかにしている点が非常に画期的である。調査の結果、使用するストラテジーの内容には変化がないものの、上級になると同じストラテジーを初級段階よりも多く使用することが明らかになっている。しかし、この研究では日本語能力試験を使用し

て語彙知識を測っているが、様々ある語彙知識の中でどの面を見ているのかという点について言及していない。

以上、中国語話者を対象にした語彙学習ストラテジー使用に関する研究を概観した。王(2007)と于(2010)に共通する点として、よい学習者は何らかを関連付けるストラテジーをよく使用するという点と、ストラテジーを広く使用しているという点がある。しかしながら、どちらもJFL[iii]環境で学習する中国語話者が対象である。朴等(2009)は学習全体のストラテジーについて、中国と日本の大学の中国語話者に調査を行っているが、複数のストラテジーに有意差が認められたと述べている。そのため語彙学習ストラテジーにおいても、JFL環境の学習者と本調査の対象であるJSL環境の学習者とは使用傾向が異なる可能性がある。

最後にJSL環境にある日本語学習者について研究を行った、中西(2008)を紹介する。中西は日本の大学の留学生22人(うち中国語母語話者７人)を対象に、自由記述式のアンケートを実施した。その結果、非漢字圏学習者は新しい語彙や漢字を覚えるために「何度も書く」というストラテジーを全員が使用すると回答したが、中国語母語話者は、７人中４人しかこのストラテジーを使用していると回答しなかった。一方、「読むことで新しい漢字やことばを学習する」というストラテジーについては、中国語母語話者の割合は非漢字圏の学習者よりも高かった。更に、７人中３人の中国語話者が「日本と中国の漢字の字形の相違に注意しながら学習する」と回答していた。中西(2008)の研究は、被験者が非常に少なく学習段階についての言及がない。また、自由記述式のアンケート用紙については、対象者がアンケートに記入する際に日常的に使用しているストラテジーをすべて想起し、記入できたとは考えにくい。しかし、この研究からは中国人学習者の使用する語彙学習ストラテジーと欧米諸国の学習者の語彙学習ストラテジーとの使用傾向には相違点があるという示唆が得られる。

以上のように、語彙学習ストラテジーの使用傾向は多くの研究によって明らかにされてきているが、日本国内で対象を中国人学習者に限定したものは見られない。また、中国においては中国語話者を対象にした日本語の語彙学習ストラテジー研究が見られるが、JSL環境とJFL環境では異なるストラテジー使用の傾向が見られる可能性がある。

４．研究目的

本稿の目的は、日本国内で日本語を学習する中国人学習者のうち、特に自律学習が必要とされる中級以上の学習者を対象にして語彙学習ストラテジーの使用傾向と、彼らの使用する語彙学習ストラテジーと受容語彙サイズの関連を明らかにすることを目的としている。

５．調査

５．１　調査概要

調査対象者は、福岡市に存在するＡ日本語学校に在籍する中国籍の学習者17人[iv](男性９名、女性８名)である。Ａ日本語学校は、卒業後日本の大学や専門学校に進学することを目標に教育を行う日本語予備教育機関であり、週に５日、45分授業を４コマ行っている。対象者はＡ日本語学校において日本語を３カ月～１年半学習している学習者で、N1取得を目標としたクラスの学習者に10人、Ｎ２取得を目標としたクラスに７人が在籍していた。またその内、日本語能力試験Ｎ１を既に取得していた学習者は３人、Ｎ２を取得していた学習者は４人であった。Ａ日本語学校では、３カ月に１回過去の日本語能力試験や市販の日本語能力試験の模擬試験を実施し、クラスを編成している。Ｎ２取得を目標としたクラスでは、少なくともＮ３の能力はあると判断された学生が在籍していた。そのため、本稿が対象としたい中級以上というレベルに全員が達していたものと考える。

調査は2013年９月の授業時間内を利用して、Ａ日本語学校の教室において行われた。Ａ日本語学校の常勤講師でＮ２取得を目標としたクラスの担任に依頼し、調査が成績に関係ないことを伝え、実施材料３つ(JLPTの語彙テスト20分、VLT形式の語彙テスト15分、VLQ25分)を行い、全ての調査用紙をその場で回収した。回収率、有効回答率ともに100％であった。３つの実施材料については次の節に記述する。

５．２　実施材料

調査用紙は以下の３点である。

(１) Vocabulary Levels Test (VLT)の形式の語彙テスト

日本語の受容語彙サイズを測るために開発されたテストは見られない。一方、英語教育では、Nation (1990 : 75-83, 261-272) が語彙知識を測定するために開発した“Vocabulary Learning Test (以下VLT)”があり、現在でもよく使用されている。このテストは語彙の「意味」の中の「語形と意味」の受容語彙の知識を問うテストであり、本稿でもこの形式を用いて語彙テストを作成することにした。VLTは、レベル分けされた語彙リストから語彙を選定し作成したもので、一度に多くの語を対象にすることができ、学習者のおおよその語彙量を測定することができるという利点があるからである。テスト

では６つの語彙が左側に示され、右側に３つの言葉の定義が示される。学習者は右側の定義に合う語彙を６つの語彙の内、３つ選択し記入する。左側は語彙の「語形」、右側は語彙の「意味」を示しており、学習者が「語形」と「意味」の両方を知っているかを問うものである。以下、VLTの問題例を引用する。

1. Business
2. Clock
3. Horse ________ part of a house
4. Pencil ________ animal with four legs
5. Shoe ________ something used for writing
6. Wall

（Nation 1990：264より引用）

語彙テストに用いる語彙の選定についてであるが、旧日本語能力試験２級の出題基準の語彙を名詞、形容詞、形容動詞、動詞、副詞、接続詞に分類した。更に名詞の漢語は、文化庁（1978）による中国語と対応する漢語の分類に従って、S語、O語、D語、N語に分類した。分類の詳細については表２に示す。

次に問題に示す定義を中国語にするために、中国語訳と日本語の語彙の漢字が一致しないよう注意して品詞ごとに語彙を抽出した。S語とO語については、中国語の定義文の中に、問題の日本語の漢語と同じ漢字が出現してしまうために、排除した。抽出した語は表３に示した60語で、四角で囲んだ30語の中国語訳を問題とした。残り30語はダミーである。以下に、問題例を示す。採点は１問１点で30点満点とした。

1 キャンパス
2 グラフ ____ 小组、班
3 サークル ____ 样本
4 サンプル ____ 校园
5 テーマ
6 マスター

（２）日本語能力試験（JLPT）2006年２級文字語彙

日本語能力試験は1983年以来、国際交流基金が実施し、毎年５万人以上の日本語を母語としない人々が受験する試験である。2009年まで行われた旧試験は、「文字語彙」「読解」「聴解」の３部分に分かれており、様々な日

表２　中国語と対応する漢語の分類（文化庁1978を元に作成）

S 語	日中両国語における意味が同じか、またはきわめて近いもの
O 語	日中両国語における意味が一部重なってはいるが、両者の間にずれのあるもの
D 語	日中両国語における意味が著しく異なるもの
N 語	日本語の漢字と同じ漢字語が中国に存在しないもの

表３　VLTに提出した２級の語彙

名詞	N 語	$\boxed{\text{応援}}$、覚悟、菓子、$\boxed{\text{我慢}}$、$\boxed{\text{勘定}}$、官庁、$\boxed{\text{機嫌}}$、苦心、下品、$\boxed{\text{見当}}$、司会、$\boxed{\text{折角}}$
	D 語	曖昧、$\boxed{\text{記事}}$、$\boxed{\text{行事}}$、$\boxed{\text{工夫}}$、評判、模様
	カタカナ語	スカート、$\boxed{\text{コンクール}}$、$\boxed{\text{スケート}}$、$\boxed{\text{レジャー}}$、コンサート、レポート、$\boxed{\text{キャンパス}}$、グラフ、$\boxed{\text{サークル}}$、$\boxed{\text{サンプル}}$、テーマ、マスター
形容詞		おめでたい、$\boxed{\text{きつい}}$、$\boxed{\text{しつこい}}$、すごい、$\boxed{\text{そそっかしい}}$、つまらない
形容動詞		器用な、$\boxed{\text{気楽な}}$、$\boxed{\text{結構な}}$、退屈な、生意気な、$\boxed{\text{苦手な}}$
動詞		$\boxed{\text{恵まれる}}$、$\boxed{\text{割る}}$、回す、役立つ、$\boxed{\text{似合う}}$、間違う
副詞		$\boxed{\text{相変わらず}}$、いよいよ、$\boxed{\text{せめて}}$、どうせ、やがて、$\boxed{\text{わざと}}$
接続詞		$\boxed{\text{あるいは}}$、$\boxed{\text{さて}}$、しかし、しかも、そして、$\boxed{\text{それなのに}}$

本語能力を測定するものであった（日本語能力試験実施委員会等2008）。本稿では、2006年（平成18年度）に実施された旧日本語能力試験２級の文字語彙の問題から、漢字の問題を省いた問題Ⅲ～Ⅵの４問を抜粋して使用し、（１）に示した自作の語彙テストとの相関係数を求めることで信頼性を確かめることにした。2006年の旧日本語能力試験を採用した理由は、

① 筆者が作成したVLT式のテストで利用する日本語能力試験出題基準に基づいた試験であること
② ７年前の試験で、被調査者が受験の経験や勉強のために利用したことがないこと

という２点による。問題数は合わせて20問で、１問１点25点満点で採点を行った。

（３）Gu and Johnson（1996） の Vocabulary Learning Questionnaire（VLQ）Version３

Vocabulary Learning Questionnaire（VLQ）Version３は８ブロック、23カテゴリーに分かれている。以下、簡単に各カテゴリーについて説明する。

ブロック１：ビリーフ
　１）語彙は暗記するべきである
　　リストや辞書の使用や、繰り返しなどによって語彙を習得することが大切だと考える。
　２）語彙は文脈から学習されるべきである
　　読解などを通して、文脈からボトムアップ的に語彙を習得することが大切だと考える。
　３）語彙は学習してから使用されるべきである
　　語彙の使い方を知ったり、語彙を実際に使用したりしてトップダウン的に語彙を習得することが大切だと考える。

ブロック２：メタ認知規則
　１）選択的注意
　　自分にとってどのような語彙が重要であるか、どのような手がかりで推測できるか、などを判断する基準を持っている。
　２）自主性
　　教師が授業で扱わない語彙も、様々な手段を用いて自主的に習得しようとする。

ブロック３：推測ストラテジー
　１）背景知識や広い文脈を使う
　　語彙の意味を推測するために、文章の中の言い換えや自分の知識などを使用する。
　２）言語的な手がかり／すぐ周りの文脈を使う
　　語彙の意味を推測するために、文の構造や品詞、文脈などを使用する。

ブロック４：辞書ストラテジー
　１）理解のための辞書ストラテジー
　　語彙の意味を理解したい時に辞書を使用する。
　２）拡大した辞書ストラテジー
　　語彙の使用法、他の語との区別などを知りたい時に辞書を使用する。
　３）辞書を引くためのストラテジー
　　語形変化した語の形を戻す、語構造の情報を活用するなどして辞書を引く。

ブロック５：ノートテイキングストラテジー
　１）意味を重視したノートテイキングストラテジー
　　語彙の意味、類義語、反義語などをメモする。
　２）用法を重視したノートテイキングストラテジー
　　語彙の文法的な情報、使用法などをメモする。

ブロック６：記憶ストラテジー（リハーサル）
　１）リストを使う
　　語彙のリストを作成し、何度も復習することで語彙を習得する。
　２）口頭による繰り返し
　　語彙を何度も口頭や心の中で繰り返すことで語彙を習得する。
　３）視覚的な繰り返し
　　語彙を何度も書いて一字一字正確に語彙を習得する。

ブロック７：記憶ストラテジー（エンコーディング）
　１）連想／精緻化
　　語彙の意味が似た既知語、関連した感覚を結びつけることで語彙を習得する。
　２）イメージを使う
　　身体の動き、精神的イメージを用いて語彙を習得する。
　３）視覚的なエンコーディング
　　語彙を視覚化する、形式が似ている既知語を結びつけるなどして語彙を習得する。
　４）聴覚的なエンコーディング
　　音が似ている既知語を結びつけるなどして語彙を習得する。
　５）語構造を使う
　　語幹と接尾辞に分解するなど、語構造のルールを用いて語彙を習得する。
　６）意味のエンコーディング
　　意味ネットワークや、語彙のカテゴリーを作成して語彙を習得する。
　７）文脈的なエンコーディング
　　語彙単体ではなく、その語彙が使われる文や文脈を用いて語彙を習得する。

ブロック８：活性化のストラテジー
　１）活性化のストラテジー
　　学んだ語彙をスピーチ、作文、実際の場面などで使用する。

　質問項目は、横須賀（1995）らの先行研究やパイロット調査の結果を参考に調整を行い、113項目となった。（表４参照）。提出順序はVLQに倣い、カテゴリーごとにまとめた形で提示している。ただし、ブロック名やカテゴリー名は調査対象者には示していない。評価はGu and Johnson（1996）と同様に、「１．全くあてはまらない」「２．通常あてはまらない」「３．あまりあてはまらない」「４．どちらともいえない」「５．いくらかあてはまる」「６．通常あてはまる」「７．常にあてはまる」の７段階とした。Gu and Johnson（1996）は中国語母語話者の調査を行っているが、中国語版のVLQの入手ができなかったため、英語版を元に中国語母語話者に中国語への翻訳を依頼した。

表４　VLQを元にした調査用紙の項目数

ブロック	カテゴリー	ラベル	項目数
section1＜語彙学習に関するビリーフ＞			
ビリーフ	語彙は暗記するべきである	MEMORIZ	8
	語彙は文脈から学習されるべきである	ACQUIRE	4
	語彙は学習してから使用されるべきである	LEARN	5
section2＜語彙学習に関するストラテジー＞			
メタ認知規則	選択的注意	ATTEND	8
	自主性	SELFINI	7
推測ストラテジー	背景知識や幅広いコンテクストを使う	WIDECUE	5
	言語的な手がかり／すぐ周りの文脈を使う	LOCOCUE	6
辞書ストラテジー	理解のための辞書ストラテジー	DICOMPR	4
	拡大した辞書ストラテジー	DICEXTN	9
	辞書を引くためのストラテジー	DICLOOK	6
ノートテイキングストラテジー	意味を重視したノートテイキングストラテジー	NOTEMNG	6
	用法を重視したノートテイキングストラテジー	NOTEUSE	4
記憶ストラテジー（リハーサル）	単語リストを使う	VOLIST	6
	口頭による反復	ORALREP	3
	視覚的な反復	VISUREP	4
記憶ストラテジー（エンコーディング）	連想／精緻化	ASSOCIA	4
	イメージを使う	IMAGERY	3
	視覚的なエンコーディング	VISUCOD	3
	聴覚的なエンコーディング	AUDICOD	2
	語構造を使う	WDFORM	3
	意味のエンコーディング	SEMANET	3
	文脈的なエンコーディング	CONTEXT	4
活性化のストラテジー	活性化のストラテジー	ACTIVAT	6
計８ブロック	計23ブロック		計113

また、質問項目については、横須賀（1995）と橋本（2007）の先行研究やパイロット調査の結果を参考に９項目を追加し、４項目を削除した（表５、表６参照）。追加した項目についても母語話者に翻訳を依頼している。

５．３　処理手法

語彙テストは全て１問１点とし、JLPTは25点満点、VLTは30点満点で点数を算出した。VLQは113項目の下位ストラテジーが７段階評価されているが、それらを１人ずつ23カテゴリーごとにまとめて平均値を求めた。分析では、Gu and Johnson（1996）に倣って、１つ１つのストラテジーではなく、カテゴリーごとに平均値を利用した。

表５　追加した質問項目の内訳

メタ認知ストラテジー	選択的注意 8）日本語と中国語の漢字のどこが違うか(例：形や意味)に注意する。
	自主性 10）語彙知識を増やすために、日本語のアニメやテレビ番組などを見る。 11）語彙知識を増やすために、ニュースを見たり、新聞を読んだりする。
推測ストラテジー	言語的な手がかり／すぐ周りの文脈を使う 26）単語の意味を推測する時、漢字の偏や旁を分析しそれを手がかりにする。
辞書ストラテジー	拡大した辞書ストラテジー 39）辞書を引いた単語に含まれる漢字と同じ漢字を含む他の単語があれば、それもメモをする。(例：「調べる」「調査」）
	辞書を引くためのストラテジー 43）単語を調べる時その語を構成する漢字を含む他の見出し語も調べる。
ノートテイキングストラテジー	意味を重視したノートテイキングストラテジー 51）下線や丸をつけたりマーカーを使ったりして、分からない単語や注意すべき単語を目立たせる。
記憶ストラテジー(リハーサル)	視覚的な反復 66）単語を覚えようとする時、何度もノートや教科書の単語を見る。
活性化のストラテジー	活性化のストラテジー 96）日本人との会話の中で新しく学んだ語彙を使おうとする。

表６　削除した質問項目の内訳

推測ストラテジー	背景知識や幅広いコンテクストを使う I check my guessed meaning against the wider context to see if it fits in. I make use of my knowledge of the topic when guessing the meaning of a word.
記憶ストラテジー（エンコーディング）	イメージを使う I associate one or more letters in a word with the word meaning to help me remember it.　(look has two“eyes”in the middle.)
	聴覚的なエンコーディング I remember together words that are spelled similarly.

５．４　分析方法

前述の調査データを基に、統計手法による分析を行う。分析にはSPSS Statistics 20を使用した。まず、VLTの信頼性を確かめるために日本語能力試験の「語彙」との相関係数を求めた。次に中国語話者がよく使用する語彙学習ストラテジーを明らかにするために、VLQのカテゴリーの平均値と標準偏差を求めた。続いて、中国語話者の語彙知識と語彙学習ストラテジーとの関連性を明らかにするために、VLQの各個人のストラテジーのカテゴリーの平均値とVLTの得点の相関係数を求めた後、得点を予想するためにストラテジーを説明変数、VLTを従属変数にして重回帰分析を行った。

５．５　語彙テストVLTの信頼性

VLTと日本語能力試験「語彙」の実施結果と２つの相関関係は表７、８のようになった。

日本語能力試験「語彙」は25点中、平均値が17.29（$M = 17.29$, $SD = 4.61$）、VLTは30点中、平均値が21.06（$M = 21.06$, $SD = 5.97$）であった。２つのテストの相関係数を求めた結果、２つは有意な中程度の正の相関関係にあることが分かった（$r = .697$, $p < .01$）。このことから、日本語能力試験「語彙」と今回作成した日本語版VLTには関連があることが示された。

６．結果

６．１　語彙学習ストラテジーの使用傾向

語彙学習ストラテジーの使用傾向を明らかにするために、VLQで得られた結果を元に基礎統計量を算出した。その結果は以下の表９のようになった。

ビリーフのブロックでは、ACQUIRE「語彙は文脈から習得されるべきである」（$M = 5.12$, $SD = 1.20$）とLEARN「語彙はまず学習してから使用されるべきである」（$M = 5.61$, $SD = .75$）が平均値５を超えているのに比べ、MEMORIZ「語彙は暗記すべきである」（$M = 4.29$, $SD = .82$）と平均値は低かった。

次にストラテジーのブロックごとの特徴について述べる。まずメタ認知ストラテジーのブロックでは、SELFINI「自主性」（$M = 4.65$, $SD = .92$）に比べて、ATTEND「選択的注意」（$M = 4.99$, $SD = .97$）の平均値が高かったが、どちらも平均値は５未満であり、全体を通して見れば、メタ認知ストラテジーがよく使用されているとは言い難い結果であった。続いて、推測ストラテジーのブロックではWIDECUE「背景知識や幅広いコンテクストを使う」（$M = 5.05$, $SD = .96$）のほうが、LOCOCUE「言語的な手がかり／すぐ周りの文脈を使う」（$M = 4.77$, $SD = 1.19$）よりもよく使用されている。辞書ストラテジーについてはDICOMPR「理解のための辞書ストラテジー」（$M = 4.99$, $SD = 1.27$）とDICEXTN「拡大した辞書ストラテジー」（$M = 5.01$, $SD = 1.06$）はほぼ平均値が５で

表７　語彙テストの結果の記述統計

	M	*SD*
JLPT	17. 29	4. 61
VLT	21. 06	5. 97

表８　JLPT「語彙」とVLTの相関関係

	r	*p*
JLPT VLT	. 697**	. 002

**. 相関係数は 1% 水準で有意（両側）

表９　語彙学習ストラテジーの基礎統計量

	MEMORIZ	ACQUIRE	LEARN	ATTEND	SELFINI	WIDECUE	LOCOCUE	DICOMPR
M	4. 29	5. 11	5. 61	4. 99	4. 65	5. 05	4. 77	4. 99
SD	0. 82	1. 20	0. 75	0. 96	0. 92	0. 96	1. 19	1. 27

	DICEXTN	DICLOOK	NOTEMNG	NOTEUSE	VOLIST	ORALREP	VISUREP	ASSOCIA
M	5. 01	4. 75	5. 03	4. 72	4. 38	4. 8	4. 66	4. 62
SD	1. 06	1. 18	1. 07	1. 34	1. 35	1. 21	1. 40	1. 31

	IMAGERY	VISUCOD	AUDICOD	WDFORM	SEMANET	CONTEXT	ACTIVAT
M	4. 33	4. 49	4. 79	4. 45	4. 49	4. 82	5. 25
SD	1. 89	1. 36	1. 72	1. 51	1. 27	1. 17	0. 85

※ラベルの内容は表４「VLQ を元にした調査用紙の項目数」と同様である

高めだが、DICLOOK「辞書を引くためのストラテジー」(M = 4.75, SD = 1.18)のみがそれに比べると低い。ノートテイキングストラテジーでは、NOTEMNG「意味を重視したノートテイキングストラテジー」(M = 5.03, SD = 1.07) のほうがNOTEUSE「用法を重視したノートテイキングストラテジー」(M = 4.72, SD = 1.34) よりも平均値が高かった。記憶ストラテジー(リハーサル) 内では、VOCLIST「単語リストを使う」(M = 4.38, SD = 1.35)が目立って低く、VISUREP「視覚的な反復」(M = 4.66, SD = 1.40)、ORALREP「口頭による反復」(M = 4.80, SD = 1.21) がそれに続く。記憶ストラテジー(エンコーディング)もまた、平均値が５未満と全体を通して低い値であったが、特にIMAGERY「イメージを使う」(M = 4.33, SD = 1.89)、VISUCOD「視覚的なエンコーディング」(M = 4.49, SD = 1.36)、WDFORM「語構造を使う」(M = 4.45, SD = 1.51)、SEMANET「意味のエンコーディング」(M = 4.49, SD = 1.27) は低い値であった。最後に、語彙の使用に関わるACTIVAT「活性化のストラテジー」(M = 5.25, SD = .85) は、平均値が５以上でよく使用されていると言える。

ストラテジー全体を通してよく使用されているストラテジーは、平均値が高い順にACTIVAT「活性化のストラテジー」(M = 5.25, SD = .85)、WIDECUE「背景知識や幅広いコンテクストを使う」(M = 5.05, SD = .96)、NOTEMNG「意味を重視したノートテイキングストラテジー」(M = 5.03, SD = 1.07) 、DICEXTN「拡大した辞書ストラテジー」(M = 5.01, SD = 1.06) 、ATTEND「選択的注意」(M = 4.99, SD = .97)となった。一方、平均値が低い５つのストラテジーは、平均値が低い順にIMAGERY「イメージを使う」(M = 4.33, SD = 1.89)、VOCLIST「単語リストを使う」(M = 4.38, SD = 1.35)、WDFORM「語構造を使う」(M = 4.45, SD = 1.51) SEMANET「意味のエンコーディング」(M = 4.49, SD = 1.27)、VISUCOD「視覚的なエンコーディング」(M = 4.49, SD = 1.36) となった。

６．２　語彙学習ストラテジーと受容語彙サイズとの関連性

日本語を学習する中国語話者が使用する語彙学習ストラテジーと受容語彙サイズにどのような関連があるかを明らかにするために、語彙学習ストラテジーの各カテゴリーの平均値とVLTの得点の相関係数を算出した。その結果を表10に示す。

表10より、メタ認知ストラテジーのSELFINI「自主性」(r = .74, p < .01) と推測ストラテジーのWIDECUE「背景知識や幅広いコンテクストを使う」(r = .56, p < .05) のみに有意な相関関係が認められた。また、「自主性」は強い正の相関、「背景知識や幅広いコンテクストを使う」は中程度の正の相関が認められた。その他のストラテジーは有意な相関関係も見られず、相関係数も非常に低い結果となった。

次に、ビリーフとストラテジーから語彙テストVLTの得点を予測するために、独立変数を各ビリーフとストラテジー、従属変数をVLTの得点に設定し、重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。その結果を表11に示す。

表11からわかるようにSELFINI「自主性」のみが有意水準１％で統計的に有意であり、VLTの得点の52%を説明できることが明らかとなった (R^2 = .52, p < .01)。なお、VLTと「自主性」は強い正の相関関係にあるが (r = .74, p < .01)、VIF = 1で多重共線性に問題はなかった。このモデルを図１に表した。

表10　VLTと語彙学習ストラテジーの相関関係

	MEMORIZ	ACQUIRE	LEARN	ATTEND	SELFINI	WIDECUE	LOCOCUE	DICOMPR
r	−0. 12	−0. 18	−0. 16	0. 37	. 74**	. 56*	0. 33	−0. 08
p	0. 66	0. 50	0. 55	0. 14	0. 001	0. 019	0. 20	0. 77

	DICEXTN	DICLOOK	NOTEMNG	NOTEUSE	VOLIST	ORALREP	VISUREP	ASSOCIA
r	0. 09	0. 19	−0. 31	−0. 29	0. 01	−0. 12	−0. 29	0. 06
p	0. 73	0. 47	0. 22	0. 25	0. 97	0. 65	0. 27	0. 82

	IMAGERY	VISUCOD	AUDICOD	WDFORM	SEMANET	CONTEXT	ACTIVAT
r	−0. 04	0. 08	−0. 08	0. 17	0. 05	−0. 20	−0. 08
p	0. 87	0. 77	0. 75	0. 53	0. 86	0. 45	0. 75

* p < .05；** p < .01

※ラベルの内容は表４「VLQを元にした調査用紙の項目数」と同様である

表11　ステップワイズ法による重回帰分析の結果

	b	SE	β
SELFINI	4. 8	1. 13	0. 74**

＊＊ p＜ .01，R^2＝ .52，F＝ 18. 11**

SE：StandardError、有意であったストラテジーのみ表示

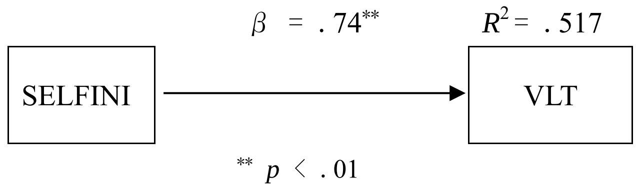

図１　重回帰モデル

７．考察

７．１　語彙学習ストラテジーの使用傾向についての考察

まず、ビリーフについては、調査対象者は語彙を記憶することよりも語彙の意味や語彙を使用することを重視する傾向があることが分かった。ストラテジーについては、最低でも平均値は７点中4.3点以上となっており、全体的にストラテジーの使用が高い。特によく使用していたのが、「活性化のストラテジー」、「背景知識や幅広いコンテクストを使う」、「意味を重視したノートテイキングストラテジー」、「拡大した辞書ストラテジー」、「選択的注意」であったが、これは王（2007）の調査中、語彙テストの成績上位群が使用していた「文脈から語の意味を推測する」「辞書で単語の発音、意味、用法を調べる」「日本語を実際に使うことで語彙を覚える」との一致がかなり見られる。しかし、一方で王（2007）の調査では、語彙テストの成績上位群は「連語で記憶する」というストラテジーをよく使用しており、于（2010）の調査の日本語の習熟度の高い対象者も連想や連絡を用いて記憶していたが、本稿の調査では、「イメージを使う」、「語構造を使う」、「意味のエンコーディング」、「視覚的なエンコーディング」などの語彙と何かを結びつけて使用するようなストラテジーは概ね使用が低めであった。王（2007）の調査ではレベルの記述がないが、于（2010）の２回目の調査対象者は上級に達したグループの中の上位群であるため、17人中７人がＮ２取得を目指していた本稿の調査対象者達よりも高いレベルにあったと思われる。中級を含まず、全員が上級に達するようなレベルであれば、語彙と何かを結びつけるような複雑なストラテジーの使用が高い可能性がある。

次に、ビリーフとストラテジーの関連について考察する。ビリーフでは語彙の意味や使用を、暗記することよりも重視していたが、このことは、記憶ストラテジー（リハーサル）ブロックや記憶ストラテジー（エンコーディング）ブロックに属すカテゴリーは全て平均値が4.9未満であるのに対し、語彙の使用に関わる「活性化のストラテジー」の平均値が5.25と高めの結果であることに反映されていると思われる。EFL環境におけるGu and Johnson（1996）の調査では、活性化のストラテジーの平均値は非常に低く、その理由は時間や努力が必要とされるストラテジーであるため、低くても当然であるとされていたが、今回の被調査者はJSL環境にいるため、活性化のストラテジーの使用が比較的容易なのではないかと考えられる。一方、意味と関わる推測カテゴリーについてはビリーフとの関連は見られなかった。

まとめると、第二言語環境の中上級の中国人日本語学習者は語彙を暗記することよりも、語彙を文脈から理解することや語彙の使用を重視する傾向にある。語彙学習ストラテジーは全体を通して多くを使用しており、ブロック単位でカテゴリーを見ると、語彙の使用（活性化のストラテジー）はよく行っているが、記憶するために繰り返したり、視覚情報などほかのものと語彙を結びつけたりする「記憶ストラテジー」の使用は少なかった。

７．２　語彙学習ストラテジーと受容語彙サイズとの関連性についての考察

相関係数と重回帰分析の結果から、読み物、新聞、アニメなどを見るなどといった自主的に何かを授業外でも見たり読んだりしているほど、受容語彙のサイズが大きくなる傾向があると分かった。これは、Gu and Johnson（1996）の主張を支持するものであるが、一方で、Gu and Johnsonの調査では有意な正の値であった「辞書を引くためのストラテジー」、「活性化のストラテジー」、「意味のエンコーディング」、有意な負の値であった「視覚

的な反復」「イメージを使う」とも相関関係や因果関係は見られなかった。理由の１つとしてはGu and Johnson (1996) のサンプル数が800以上であったのに対し、今回の調査のサンプル数が17しかないことがある。あるいは、Tanyer and Öztürk (2014) は、重回帰分析の結果、最もよく使用されるストラテジーと受容語彙に有意な値は見られず、最も使用が少なかったストラテジーと受容語彙に有意な値が見られたことから、語彙習得のためには、全てのタイプのストラテジーを満遍なく使用する必要があるため、使用が低いストラテジーに有意な値が見られたのではないかと考察している。「自主性」の使用については、23ストラテジー中、平均値が下から７番目であったが、本稿の調査の場合は、全体的にストラテジーの使用がかなり高いため、「自主性」以外のストラテジーでは因果関係が見られなかった可能性もある。

８．おわりに

８．１　考察のまとめ

第二言語環境の中上級の中国人日本語学習者がよく使用しているストラテジーには、推測ストラテジーの「背景知識や幅広いコンテクストを使う」、語彙の使用法や他の語との区別を知りたい時に辞書を使用する、語彙の文法的な情報や使用法などをメモするという辞書ストラテジーの「拡大した辞書ストラテジー」、学んだ語彙を使用する「活性化のストラテジー」があり、この結果はビリーフの値とも関連があることが分かった。

語彙学習ストラテジーの使用と受容語彙サイズとの関連については、授業外で自主的に様々な手段を用いる「自主性」に、相関関係と因果関係があることが明らかになった。この点はGu and Johnson (1996) の主張と一致した。

８．２　本稿の課題と今後の展望

本稿の調査での最も大きな問題はサンプル数が少ないことである。調査結果の信頼性が低いため、今後はサンプル数を増やし、語彙テストや調査全体の信頼性を高める必要がある。また、調査票VLQについては項目数が多く、調査対象者の負担となったようだった。それぞれのカテゴリー内で、項目数が異なる点も問題である。今後は項目を減少させる、あるいは特定のカテゴリーに限定した調査票を作成するなどの工夫が必要である。また、調査対象者が正しくストラテジーの内容を理解できているのか、実際にはどのようにストラテジーを使用しているのかなどをインタビューや観察などの質的調査によって確認する必要もある。

最後に、于 (2010) によれば日本語習熟度が高い学習者は、語彙学習ストラテジーを全体的によく使用しており、Mori (2010) も成績上位群は学習状況をモニターし、学習時間を多岐に分配してよりアクティブに学習していることを指摘している。つまり、語彙習得に成功するためには、すべてのタイプの語彙学習ストラテジーを使えるようになる必要がある。そのため、今後はTanyer and Öztürk (2014) が言及したとおり、学習者の語彙学習ストラテジーの使用傾向の調査結果を効果的なストラテジーの練習に繋げるような指導についても考えていきたい。

[i] 自律学習とは「学習者が自分で自分の学習の理由あるいは目的と内容、方法に関して選択を行い、その選択に基づいた計画を実行し結果を評価すること」(新版日本語教育事典2005: 773)。

[ii] JSL=Japanese as a Second Language.「Second Language (第二言語)」とは「その言語を学ぶ社会の中で社会的伝達機能を持っている」もの (オックスフォード 1994: ６)。

[iii] JFL=Japanese as a Foreign Language.「Foreign Language (外国語)」とは「それを学ぶ社会の中では、直接社会的な伝達機能を持っていない」もの (オックスフォード1994: ６)。

[iv] 中国籍であることは確認できたが、調査用紙で第一言語を問わなかったため中国語母語話者であることを確認できなかった。

付記

本稿は、九州大学大学院比較社会文化学府提出の修士論文の一部に加筆修正を行ったものである。

引用文献

相澤一美 (2006)「語彙習得をどう捉えるか」『月刊 言語』35 (4) , pp. 32-37

押尾和美・秋元美晴・武田明子・阿部洋子・高梨美穂・柳澤好昭・岩元隆一・石毛順子 (2008)「新しい日本語能力試験のための語彙表作成に向けて」『国際交流基金日本語教育紀要』(4) , pp. 71-86

オックスフォード, R　宍戸通庸・伴紀子 (訳) (1994)『言語学習ストラテジー 外国語教師が知っておかなければならないこと』凡人社 (Oxford, R. (1990) . *Language learning strategies: What every teacher should know*. New York, USA: Newbury House)

国際交流基金・財団法人日本国際教育支援協会（2006）『日本語能力試験出題基準【改版】』凡人社．日本語能力試験実施委員会・日本語能力試験企画小委員

国際交流基金・日本国際教育支援協会「日本語能力試験　旧試験との比較」
http://www.jlpt.jp/about/comparison.html
（2013/10/25閲覧）

独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）（2015）「平成27年度外国人留学生在籍状況調査結果」<http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2015/index.html>（2016年7月30日アクセス）

中西泰洋（2008）「日本語学習者の漢字・語彙の学習方法について」『神戸大学留学生センター紀要』14，pp. 21-27

日本語教育学会編集（1982）『日本語教育事典』大修館書店

日本語教育学会編（2005）『新版日本語教育事典』大修館書店

日本語能力試験実施委員会，日本語能力試験企画小委員会（2008）『平成18年度日本語能力試験分析評価に関する報告書』国際交流基金，日本国際教育支援協会

ネーション，P.　吉田晴世・三根浩（訳）（2005）『英語教師のためのボキャブラリー・ラーニング』松柏社（Nation, P.（2001）*Learning vocabulary in another language*. Cambridge: Cambridge University Press）

橋本ゆかり（2007）「初級日本語学習者の言語知識の量的側面と語彙学習ストラテジーの関わり―ハンガリーの日本語学習者を対象に―」『ICU日本語教育研究』4，pp. 21-36

文化庁（1978）『中国語と対応する漢語』大蔵省印刷局文化庁

朴延子・野崎浩成・田中佳子・江島徹郎・梅田響子（2009）「メディア接触と日本語の学習ストラテジーに関する調査―中国語および韓国語の母語話者を対象に―」『教育メディア研究』16（1），pp. 65-75

三好裕子（2005）「初中級クラスの一事例に見る語彙学習の問題」『早稲田大学日本語教育実践研究』2，pp. 67-76

山下喜代（2005）「日本語学習のための辞書―『漢語接辞用法辞典』の構想―」『早稲田日本語研究』14，pp. 96-107

横須賀柳子（1995）「日本語の語彙における学習ストラテジー」『日本語教育の課題』pp. 219-248

于琰（2010）「高级日语学习者的语言学习策略――基于广东外语外贸大学的调查」『日語学習与研究』2010年第3期総148号pp.89-93

王婉莹（2007）「大学专业与非专业学生日语词汇学习策略研究」『日語学習与研究』2007年第1期総第128号pp.33-38

Gu, Y. and Johnson, R. K.（1996）Vocabulary learning strategies and language learning outcomes. *Language Learning*, 46,（4）, pp. 643-679

Hamzah, M. S. G., Kafipour, R., & Abdullah, S. K.（2009）. Vocabulary learning strategies of Iranian undergraduate EFL students and its relation to their vocabulary size. *European Journal of Social Sciences*, 11（1）, pp. 39-50.

Kalajahi, S. A. R., & Pourshahian, B.（2012）. Vocabulary learning strategies and vocabulary size of ELT students at EMU in Northern Cyprus. *English Language Teaching*, 5（4）, pp. 138-149.

Mori, S.（2010）Japanese language learning strategies by high and low achievers.『小出記念日本語教育研究会』（18）, pp. 41-61

Nation, P.（1990）*Teaching and learning vocabulary*. Boston: Heinle and Heinle.

Nation, P.（2001）*Learning vocabulary in another language*. Cambridge: Cambridge University Press

O'Malley, J.M. and Chamot, A.U.（1990）*Learning strategies in second language acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press

Schmitt, N.（1997）. Vocabulary learning strategies. In N. Schmitt & M. McCarthy（Eds.）*Vocabulary: Description, acquisition and pedagogy*. pp. 119-227.

Tanyer, S., & Öztürk, Y.（2014）. Pre-service English teachers' vocabulary learning strategy use and vocabulary size: A cross-sectional evaluation. *Journal of Language Teaching and Research*, 5（1）, pp. 37-45.

The relationship between vocabulary learning strategies and receptive vocabulary size for Chinese JSL learners

AMANO, Yuko

It is impossible for teachers to expand learners' vocabularies sufficiently through classes. Hence, language learners have to add to their vocabularies themselves. Proficient learners use a variety of vocabulary learning strategies. Several studies have been conducted on the strategies employed by Chinese Japanese learners (Nakanishi 2008; Wang 2007; Yu 2010). This study investigates the vocabulary learning strategies used by Chinese Japanese-as-a-Second-Language (JSL) learners and the relationship between vocabulary learning strategies and receptive vocabulary size. Gu and Johnson's Vocabulary Learning Questionnaire (VLQ; Gu and Johnson 1996) and a vocabulary test that was similar in format to the Nation's Vocabulary Levels Test (VLT; Nation 1990) were used to collect data. Descriptive analyses of vocabulary learning strategies indicated that participants frequently used context and activation strategies such as contextual guessing and meaning-oriented note taking. Conversely, the use of images, vocabulary lists, and word structure to memorize vocabulary was not frequently practiced, which demonstrated that participants did not value memorizing words. In addition, correlation and multiple regression analyses were conducted to measure the relationship between vocabulary learning strategies and receptive vocabulary size. A correlation was detected between self-initiation strategies, contextual guessing, and receptive vocabulary size. ($r = .74$, $p < .01$; $r = .56$, $p < .05$). Multiple regression analyses revealed that only self-initiation strategies significantly explained the variation in receptive vocabulary size, which was 52% ($R^2 = .52$, $p < .01$). This study shows that learners who take initiative to learn vocabulary can improve their vocabulary size.